

じゃりみち



……仮設支援情報……

第10号 発行日 1996. 1. 20

阪神大震災地元NGO救援連絡会議

仮設住宅支援連絡会

TEL: 078-362-5951 / FAX: 078-362-5957

E-mail: ngoteam@mb.osaka.intoweb.or.jp

口座番号: 01180-6-68556 (郵便振替)

新年会のお知らせ

96年が始まりました。じゃりみち第10号お送りいたします。どうぞ今年もよろしくお願ひいたします！……ということで新年会のお知らせです。

1月24日全体会のあと20:30~22:00(予定)「よろずや」にて。

全体会・仮設寺子屋のお知らせ

★1月24日(水) 17:00~18:00 毎日新聞神戸ビルにて「仮設寺子屋」

次回の寺子屋は「自立支援とは」第3弾ということで、現在国際保健協力市民の会(SHARE)と「保健所支援ネットワーク」として東灘区で保健所と共に活動している、アジア保健研修所(AHI)の事務局長の池住氏をお招きします。

★引き続き 18:30~20:00 「全体会」

4月以降についての話し合いをもう少し詰めていこう、という前回の提案から開かれることになりました。多くの参加お願ひいたします。

全体会の報告

今年に入って最初の全体会が1月10日に開かれた。協議内容は、年末年始の活動報告及び4月以降の活動について。

3月にNGO連絡会議が活動を終了すると同時に毎日新聞社の事務所は使用できなくなることや、1年というある意味で区切りのある時期ということから、今後連絡会をどうしていくか、また各団体がどう動いていくのかということについて話し合った。

続けていくと応えた団体の「これからが本番、やめられない。仮設住宅が無くなるまで。」という声や「今までのやり方では続かない、通いボランティアの体制や資金体制の見直し等が必要。」という声が出た反面、神戸での活動を終了する団体の「後方支援をどうしていくのが課題」といった声のように、それぞれが大きな転機を迎えているのではないだろうか。また連絡会を続けていくことに対しては、「今後の方向性をしっかり立てていくことが必要」という意見と同時に「他のボランティアとの接点として、自分達の勉強の場として連絡会続けて欲しい」という声があがった。これらについては今後全体会または別に時間を設けてつめていきたい。

年末年始の報告

年末年始にはたくさんのイベントが企画されました。その報告です。(全体会より)

各団体が色々なところで炊き出し、配食サービス、足湯など様々な催しをしたところ、正月を迎えられないだろうと思っていたお年寄りの方などに大変喜んで頂けたという報告や、アルコールで寂しさを紛らわしていた方がふれあいセンターで楽しそうに話をするようになったなど、やって良かったという報告がありました。またバス2台での「三社参り」を企画し、元の街に帰るための拠点作りの第1弾も行われるなどなかなかいい成果が得られました。

しかしその反面、自治会とボランティアとの想いの違いから、自治会への移行に際してすれが生じてきているという報告もあり、改めて自治会とボランティアとの関係作りの難しさを確認しました。

お詫ひとお願い

毎回じゃりみちの発信が遅れてしまい、本当に申し訳ありません！(なにぶん人手不足なため……)じゃりみちを手伝って下さる方、発送作業等事務作業を手伝って下さる方、大募集！(週1回でも構わないし、交通費と昼食代補助あります。)

心の郵便局に集まった葉書は1月19日現在1,679枚です。反応については次回のじゃりに予定中。



< 仮設は今.. >

三木市編

12月26日（三木の仮設）

朝8:30頃、奈良から三木市の仮設住宅に向けて車3台で出発。昨晩からの雪で、恐ろしく渋滞していて、三木仮設まで6時間かかってしまった。予定よりも1時間程遅れて、足湯・掲示板作り・花壇作り・階段の横にスロープを作る作業を始める。私は足湯をやったのだが、足湯をしながらの話は、「地震からもうすぐ1年になるが振り返ってみるととても大変だった」、「仮設住宅はとても寒い」、「生活用品、洋服などの不足」、「使いにくく寒いのであまりお風呂に入っていない」などだった。やはり仮設の寒さは厳しいらしい。まず、外から帰ってきてエアコンをつけようとしてもリモコンが凍っている、というか寒さで動かなくなってしまうそう。あるおばちゃんはリモコンを日の当たる所か布団の中に入れておくと言っていた。仮設の壁はスチールそのままの所がある。外気との気温差で壁に水滴が出来てしまうのだが、それがポタポタと落ちてくるほどひどいらしい。押入の中もひどいらしく、壁側には布団を入れておけないという話を聞いた。（そのおばちゃんの家は一番端で、それも関係あるのではないかということだった。また一番端で道路に面しているために、騒音がひどいということもおっしゃっていた。）

そんなおばちゃんたちといろいろな話をしていると、足湯・バザー・お茶会などの必要性を感じる。また、あるおばちゃんが「化粧をして綺麗にしたいわ。でも、わざわざ買うのもねー。仮設やし。」という言。金銭的なことで無理かもしれないのだが、日常生活の中でのちょっとした楽しみは大切だと思った。女性は、口紅を塗るだけで少し嬉しい気分になるということが同性としてすごく分かるので、その言葉はとても印象的だった。夏のキャンプで作ったベンチ・テーブルは有効に使われているようだ。新しく作ったスロープや掲示板も使ってもらえると良いのだが、2月の足湯キャンプで関わっていく他の仮設にもベンチやテーブルを作ると良いのではないだろうか。

文責：FIWC関西委員会 小島顕子、西村麻里

ガレキは走る

1月14・15・16・17日と関東方面で行われた全国キャラバンは参加者が多く、にぎやかなものになりました。そこで、それぞれの方に行ってきた感想を簡単に報告していただきました。

全国キャラバン珍道中記（グループ外 進藤氏）

タイミングさえあれば全国キャラバンのどこかに参加したいと思い、たまたま今回の震災1周年のキャラバンにタイミングがあった。ただそれだけのことなのだが、今回の東京行は、私にとっては必然的な旅だったような気がする。

14日・16日（中15日は世田谷区役所でのガレキ展示）の2日とも“神戸からの報告”“これからの神戸そして東京”というテーマで場所を変えてのシンポジウムであった。

参加者の違いということから話の切り口は少し変わりつつも、2回続けての参加者もあり、2日目も1日目をふまえて話が展開していき、なかなか有意義な2日間になった。

東京の若い人達の「一体僕たちは神戸に対し何をすればいいのか、何もしなくていいのか」という問いに接しながら、実はそれは私自身の問いかけであることに気付く。そのことをずっとずっと考え続けていた。

2日目の最後、参加者から「本当にボランティアは必要なのか」という質問に、私は「絶対に必要だったし、これからも必要だ」と心の中で大きく叫んでいた。日々現場にいてそこでの居心地のよさに甘え、つまらない人間関係にいじけたりしている。それでも1年間被災した神戸に、神戸の人々に接してきたからこそ“ボランティアは必要だ”と確信できるのだろう。

神戸を伝えていくことは、見失ってしまいそうなど大切なものを自分の中に取り戻すことでもあった。今回のシンポジウムをしかけて下さった皆さん、ありがとう。

ひとこと

(SHARE 市岡氏)

神戸からどんな発信をしたらいいのかを教えてもらいたくて気軽に同行させてもらった。そしてほんと一に教わり、考え、そして楽しんだ3日間だった。

小さな輪から大きな輪へ
(心のガレキネットワーク 岸岡氏)

大勢の中のほんの少しの気持ち、想い。それが本当に心強く思え、一番大切だと思った。

「そこから持ち帰って発信すること、輪を大きくすること。」今回それは自分自身にも言えることだと感じた。全国に訴えることと平行して自分たち自身の周りも掘り起こしていくべきではないのだろうか？地道に、地道に積み上げていく。やはり地元が支えていかねば。

今回は「自分の振り返りと次のステップに踏み込むためのいい充填期間になった。前進あるのみ。そして人は人によって支えられていることを再確認した。

遠方の人へ。単発でもいい。「元気」を持って来て欲しい。

成人式に話して（事務局 隆太）

彼らにとってはある意味生活に関係のない、考えにくいことだったのかもしれない。

「無知」の世界とどう戦うか、これが課題かもしれない。

昨年(1995年)の12月に開かれた市民とNGOの「防災」国際フォーラム。1年を前にして、今の神戸の現状と課題を整理してまとめられたものがこの「神戸宣言」である。

1月17日、一つの経過地点として様々な催しがあった。しかし今日という日もまた確実に369日目の震災の日なのである。

大切なのはこの「宣言」をこれからいかに実現していくかということではないだろうか。

(村井)

“神戸宣言”

市民とNGOの「防災」国際フォーラム

私たちは阪神・淡路大震災から1年目を前に12月8日から10日までの3日間、神戸市内で“市民とNGOの「防災」国際フォーラム”を開催し、『くらし再建へ「いま」見すえて』をメインテーマに被災者と被災地のその時々の「いま」を語り合った。フォーラムは被災地にかかわるさまざまなグループと個人が討論だけでなく、音楽、演劇、舞踊、児童画、パザーなど多彩な分野で参加した。参加者は2万人を越え、被災者のかかえる多くの複雑な課題をともに考え、解決への糸口を探った。

開会のステージで地震当時2年生だった小学生の朗読した「生きていて本当によかった。でも帰る家がない」という詩は、会場の人々の胸を打つと同時に、フォーラム全体の出発点ともなった。まさに地震災害は1月17日に終わったのではなく、あれから328日間、毎日私たちを責め続けているのだ。これ以上、自然災害を人災としてはならない。にもかかわらず、私たち被災者は余りにも静かに現実に対処しようとしているのではないか。

希望の追求と怒りの声を高く上げよう。もっと被災の厳しい実情を声高に語ろう。外国人、高齢者、障害者、女性、子どもを核に、人々のネットワークをつくり広げよう。

私たちは力を合わせて立ち上がり、フォーラムを契機にこのことを実行していきたい。そしてまず最初に、次の3点をフォーラム参加者の総意として、強く訴えたい。

1. まち復興の主体は被災者自身であり、被災者が復興の目標と過程を決めるものである。新しい私たちのまちは震災の経験を十二分に生かして、生活サイクルと暮らしを営む人々の生活リズムから発想する身の丈に見合った、それでいて国内、海外と広く結び合わさったまちを作りたい。
2. 住居の再建はくらしを建て直す基本である。その実現のため国は損壊した住宅の再建に必要な資金を保障する。同時に国および自治体は、被災者がもと住んでいたまちに戻って暮らすプログラムを早急に明示し、被災者の希望を実現する具体的な方策を提示して、被災者と語り合うべきである。
3. 生活の継続が困難な被災者にとって、いまもっとも必要なのは具体的な仕事や職場の確保や生活再建のための資金の用意と、医療、福祉のきめ細やかな対応である。

フォーラムではまた、ボランティアやNGOのこれまでの活動と今後のあり方についても、率直な意見の交換があった。ボランティアやNGOは震災1年が近づくにつれて資金と人材に限界がみえ始めている。ボランティア、NGOの重要性を認識し、社会の中に積極的に構築していかなければならない。

私たち市民は、これらのことを政府のアジア防災政策会議に提起していきたい。被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「つなげる」「つくる」「決める」行動を重ね、新しい社会システムを創造していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏みだしていくことを、強く呼びかける。

1995年12月10日